

七年も経つてゐるといふことがどうやらあなたに強く響いた様子ですねえ。世間には時効説といふのがあります。そりや當然のことです。しかしわたしは、この場合その説が妥當するか否か疑問に思ふのです」

「そいつはわたしにも分りかねますが、わたしの考へを明らかに申せば、この場合、すべてはその問題が中心をなしてゐるらしく思はれるんですが」

「全く眞面目でさう仰つしやるんですか？」と、インシエテツンは眠むやうにみつめた。「ええ、全く眞面目です。感情の遊戲や、流辯を弄して取扱ふべき問題ぢやありませんから」

「な」

「あなたがさう仰つしやるのはどんな意味なのか、是非ひとつ伺つてみたいものです。この件に對して何とお考へになるか、ぶちまけて話してくれませんか？」

「インシエテツン、あなたの立場はひどいものです。そしてあなたの一生の幸福が失はれてしまつた。しかしですね、もしあなたが情人を射殺したら、あなたの幸福は二重に失はれるのです。愛難の痛みの上に、加害についての苦惱が加はつてくる。どんなことがあつてもあなたはそいつをやつつけなきやならないかどうか、すべてはその問題を中心として廻轉するのですよ。彼が、或ひはあなたが、いづれかひとりが葬り去られねばならない、それほどまでにあ

196
3行目

なだは傷けられ、侮辱を感じ、激昂しておいでなんでしょうか？ それほどの状態なんですか？」

「わたしには分らない」

「分つてなきやなりませんな」

インシエテツンは、つと立ち上つて窓際に行き、興奮しきつていらしながら窓ガラスをとんとん敲く。やがてさつと振り返つてザライストルフの傍へつかつか歩み寄つた。「いや、それほどぢやない」

「ではどんなだといふんです？」

「どんなかといへば、わたしはこの上もなく不幸なのです。傷けられ、態もないやうな衰切られ方ですが、それでゐて憎悪の感情など露ほどもなければ、復讐の焰を燃やすなどといふこともさつぱりない。どうしてこんなかと自問してみるのに、まづ第一には歲月のせむと見る他に何もみあたらない。世間がや、常に贖ひ得ざる罪といふことをいひますね。神に對してさういふのは確かに間違つてゐるが、人間に對しても誤りです。時といふものが、純粹に時としてこんな働きができるとは、つひぞ考へたことがあります。それから第二にですが、わたしは家内を愛してゐるんです。かういつちや妙ですが、今もなほ愛してゐます。一切のできごとを實に怪しからんと思ふくせに、彼女の持前である晴れやかな魅力、ひと懐つこぞにまる

で心を奪はれてゐて、自分自身とも闘ひながら、心の奥底をや赦してやりたい感じがしてゐるのです」

ヴァイラースドルフは頷いて、「その氣持はすつかりわたしに分ります、インシエツテン。わたしだっておそろくさうなつたでせうよ。ところで、この件に對するあなたの態度がそんなにうで、わたしに向つて、わたしはこの女をすべてが赦せるほどに愛してゐる」といはれるし、それに、萬事はすつと遠い、昔のこと、まるで別の星のできごとみたいなのを考へ合はせると、それぢやあ、インシエツテン、あなたに訊ねますが、決闘のどつといつたこの話全體は何のためかといふことになりませんか？」

「いかにさうでも、これだけは是非起るべき道理だからです。わたしはあれこれ、さんざん考へ抜いたのです。人間は單に個々の人間ぢやなくて、ある全體に屬してゐる。そしてわれわれは常にその全體を顧慮しなくてはならない。徹頭徹尾われわれはこれに依存してゐるのです。もし孤獨で生きられるものならわたしはさうしてもいい。その場合はわたしに課せられる重荷を擔ふことになるでせう。そして眞の幸福は失はれるだらう。しかし非常に多くの人間がこの（眞の幸福）なしに生きてゆかねばならないのだ。わたしだつてさうしなきやなるまいし——また實際できるだらう。われわれは幸福でなきやならぬとは限らない。まして幸福を冀

求などできはしない。そして幸福を奪つた者を必ずこの世から葬り去る必要もない。もし浮世離れて生きるつもりならば、そんな輩は勝手に放つておくこともできるのだ。しかしながら、人間の共同生活に於ては、嚴として存在し、その條項に従つて他人とわれわれ自身、その他萬事を判斷する慣はしとなつてゐるあるものが出来上つてゐて、これに違反することは斷じて許されない。そんなことをすれば社會の侮蔑を蒙り、しまひには自らを輕視し、耐へられなくなつて拳銃を己の額にあてるやうになる。——これはまあとんだお説教をやつて、どうも失禮でした。要するにこれは誰もか自分に幾度となくいひ聞かせたことをいつてゐるに過ぎません。しかし、申すまでもなく、誰に新奇の説がたてられるでせう！ こんな次第ですから、繰り返しますが、憎惡だ何だといふものは微塵もなし、それに奪ひ去られた幸福のためにわが手を血で穢したいとは思はないのです。だが、その、何と仰つしやつてもいいが、われわれの上に壓倒的に働く社會的なあるもの、それは優雅だ、情愛だ、年敵だといつたことを顧みないのです。わたしは勝手にどうするわけにはいかない。否應なします」

「どうもわたしには呑み込めないですね、インシエツテン……」

インシエツテンは微笑を浮べながら、「あなた御自身で決めて下さい、ヴァイラースドルフ。今十時ですね。正直に申し上げますが、六時間前にはまだ散子^{ちんし}は授けられずにゐました。かう

もできれば、ああもできた。そのときはまだ逃げ道があつたのですが、今となつてはもはや如何ともする術がない、今わたしは袋小路に迷ひこんでゐます。わたしが自ら招いた結果だと仰つしやれば、さうかも知れません。わたしはもつと自制し、注意して、すべてを自分ひとりの胸に納め、そこで處理すべきだつたかも知れない。ところがわたしにとつてはまるで晴天の霹靂で、それにとても猛烈な衝動だつたんで、なせもつとまく氣分を整へなかつたかと自分を責めたりはともできません。わたしはあなたのお宅に行き、紙片を書いてお渡した。それで殿子はわたしの手を離れたのです。その瞬間を境として、わたしの不幸と、それより重大なことに、わたしの名譽の汚點とが、半分他に渡らされた。そしてわれわれの最初の言葉がこゝで取り交はされたときを以つて、完全に關知する人を持つことになりました。この關知者が存在するからには、もはやわたしは引込みがつかないのです」

「やつぱりどうもはつきりしません」と、ヴァースブルフは同じことを繰り返した。「陳腐なきまり文句を使ふのは好まないのですが、他に適當な言ひ廻しもみつからないから申しますけど、ね、インシエテッソン、萬事はわたしの胸三寸に納めておくつもりですがね」

「うん、ヴァースブルフ、きまつてさうはいはれるが、祕密嚴守なんてありつこないですからな。それにあなたが約束を守つて、他人に對しては絶対に他言なさぬとしても、あなた

は事を御承知なんですし、わたしに同感を表明して下さつたそのこと、なほその上一々わたしの考へが理解できると仰つしやつたことは、あなたの前から逃げ隠れできなくなつたといふものです。今から先き、わたしといふものはあなたの關心の對象になつて、こいつは改まりやうもない（これだけでもあまり愉快なことぢやありません）。そしてわたしが家内と交はす言葉をお聞きになると、一語一語が、さうするおつもりのある無しに拘らず、あなたの吟味を免れない。家内が節操について口にするとか、よく女たちのするやうに他の女をかれこれ批判したりする場合があると、わたしは眼のやりどころもない羽目になります。それからまた、何かまつたくありふれた侮辱的な事件をわたしが無言として（惡意がないのだから）とか、さういふことをいふ折があると、あなたは顔面に微笑を浮かべたり、或ひは少くともびくりと顔面神経を動かす。そしてあなたは心のうちで、こんな聲を聞く。（ははあ、インシエテッソンは、すべての侮辱の内容を化學的に分析してみる眞の熱意を持つてゐるが、筆素の定量を決して發見することがない。どんな事件でも察息したことのない男だ、わたしのいふのが尤もか、それとも間違つてゐませうか、ヴァースブルフ？」

ヴァースブルフは腰を上げてゐた。「あなたのいふのが尤もなのは堪らないことだと思ひますが、實際仰つしやる通りです。もつこれ以上わたしの（是が非でもやるか）であなたを煩

はざないことにします。かくある世間はとうにも致し方がない。物事の動きはわれわれの思ふやうには行かないで、他人の意志に左右されてゐますねえ。ひとがよく大げさに保證する「神の審判」なんてものはむしろ無意味なことですが、そいつはいはぬとして、反對にわれわれの名譽崇拜は偶像崇拜なんです。だが、その偶像がものをいふ限り、われわれはこれに従はざるを得ません」

インシュテッテンは頷いた。

ふたりはなほ十五分ほど一しよにゐた。そしてヴァイラースドルフが即夜出立することに話が決着した。夜行列車は十二時に出る。

やがて彼等は、ただ「おやケッシンで逢はう」とだけ、簡単な挨拶を交はして別れた。

第二十八章

翌る晩、約束どほりインシュテッテンは出發した。前夜ヴァイラースドルフが發つたのと同じ列車に乗り、夜明けの五時そこそこ、そこからケッシンへの道が左に岐れる例の驛に到着した。列車が着く早々に、季節中は毎度さうなやうに、度々話にでた蒸汽船が今日も出るのだつ

た。彼が軌道の土手から下る階段の最後の段に降りたとき、既に第一鈴の合圖が聞えた。舟着き場までの道は三分とからなかつた。彼はそのはうへ歩んで行き、ちよつとどきまぎしてゐる様子から察すると、昨日のうちに一部始終を聞き知つてゐるに相違ない船長に挨拶して、船機の近くに席を占めた。待つ間もなく船は徒橋を離れた。申し分のない上天気、燦然たる朝日の光、そして船客の姿はまばらである。エフと共に新婚旅行からの歸途、このケッシンの河岸を幌なし馬車に揺られて行つた日のことが思ひ出される——あの日は陰鬱な十一月だったが、彼自身心のうちにははれはれとしてゐた。今はちやうどその逆になつてしまつた。光は外に、彼の心中が十一月の曇り日なのだ。その後、幾度も彼はこの道を通つたことがある。野良にひろがる平和、彼が通りかかると耳を欲てる櫓内に飼はれた家畜ども、働く人々、田畑の塵、それらすべてが彼の心に快く思はれたのに、今はこれと極端な反對で、多少の雲が寄つてきて、煦々たる青空をかすかに陰らせ始めるのを喜ぶのだつた。かうして流れを下つてゆき、すばらしいグライトリンクの水面を過ぎると間もなく、ケッシンの教堂の塔が見えてきた。續いて防波堤と、船や端艇の蔭に長く延びた家並が眺められるやうになつた。いよいよ間近かに來た。インシュテッテンは船長に別れを告げ、上陸しやすくするために寄せた板橋のはうに歩を運んだ。ちやんとヴァイラースドルフが迎へてゐた。はじめは一言もいはず手を握り

合ひ、やがて堤防を横切つてホッペンガック旅館のはうに歩き、そのテント張りの中に席を取つた。

「わたしは昨日の朝、ここへ宿を取つたんですが」いきなり事件を切り出す氣にならぬがライスブルフがさういつた。「ケッシンがほんとに小つぽけな町なのを考えると、ここてこんな立派なホテルを見出すなんて驚くべきですね。わたしの友達のボーイ長が三箇國語喋るといふのを疑ひませんよ。彼の頭の分け方や、胸の開いたチョッキから判断すると、四箇國べらゐはやるだらうとおよその期待をかけ兼ねませんな……おい、ジャン、珈琲とエニヤックを持つてきて呉れないか」

なぜライスブルフがこんな調子ではじめたか、インシエテッソンにはとつくり合點できるし、それに異存もないのだつたが、やはり動搖する心が制しきれないで、つい思はず時計を取り出してみた。

「ゆつくりしたものですよ」と、ライスブルフがいつた。「まだ一時間半かそこいらありますよ。八時十五分に来るやう馬車がいつてあります。十分とはかからないですよ」

「で、場所は何？」

「最初クラムバスは森角の、墓地のすぐ裏手の所はどこかといつたんですが、すぐ自分でそ

れを取消して『いや、あそこはいけない』つていひました。で、それからふたりで、砂丘の間の或る場所を申し合はせたのです。濱邊に極く近いところ、一等前面の砂丘に切れ目があつて、海が見通せます」

インシエテッソンは顔を綻ばせて、「クラムバスは景色のいい所を選んだらしい。あの男にはいつもそんな流儀がありましたよ。どんな態度をしてました？」

「驚くべきものでしたな」

「傲然としてましたか？ 輕薄な態度でしたか？」

「どちらでもなかつたですよ。明らさまに申し上げるが、わたしは感動しましたよ、インシエテッソン。わたしがあなたの名前をいふと、彼は死人のやうに眞つ蒼になつて、しきりに落ち着かうと焦るふうでした。口元には痙攣が見えてゐました。しかしそれらはほんの一瞬間

のことで、再び落ち着きを取り戻し、それから後の彼の様子は、すべてが悲痛な諦めでした。

わたしには確かに分つてましたが、彼は今度のことから無事に遁れられないと観念してゐるのです。また遁れようと思つてもぬけません。もしわたしの判断が誤つてなにとすれば、あの男は

生き延びたいと願つてゐると同時に、生命には淡々としてゐます。何事にも手を出さくせに、

それが大して肝腎でもないのを承知してゐるのですよ」

「誰が彼の介添へをするんでせう？　といふより、誰を連れて来るのかといふ方がいいが」
 「いや、それが、彼が落着きを取り返したときの一番の心配でした。近頃の貴族の名を三擧げましたが、またそれを打ち消しましたよ。その連中は年寄りすぎるし、信心深くつけない、トレプトカの友人、ブデシプロクに電報を打つことにするといつてました。現にその友人が呼ばれて來ました。立派な男です。きりつとしてゐるが、同時に子供みたいなところがある。なかなか氣を鎮めないで、大それた興奮してのし歩き廻つてゐましたけれど、事の顛末を話してやりましたら、われわれとちやうど同じやうに『なるほど仰つしやる通りです。こいつは避けやうがない。』と云つてゐました」

珈琲が運ばれてきた。ふたりが葉巻を取る。そこでまたもヴィラースドルフは、當らず障らすのことへ話題を轉じようと企てるのだつた。

「わたしは怪訝でならぬのですが、ケッソンの人達が誰ひとりあなたに挨拶しに出て來ませんねえ。あなたがこの土地ぢや大く人氣のおありだつたのを知つてゐるんですが。あなたのお友達のギースヒューアラまで現はれないとは……」

インシュテッテンはにこりとして、「そりや、あなたがこの海岸地方の人間を見損つておいでだからですよ。半分は俗物、半分は狡猾で、わたしの嗜好にはあまり適ひません。だが、彼等

には一つだけ徳がありましてね、みんな大それた禮儀正しいのです。わたしの古劇樂のギースヒューアラだつてその例ですよ。むしろ、事の内容は誰も知つてます。が、だからこそ物見高い人間と思はれないやうに用心してゐるといふわけなんです」

このとき、左手から幌を疊んだ半帽馬車が現はれたが、まだ決めた時刻にならぬので、のろのろ近附いてきた。

「あれがわれわれの車ですか？」インシュテッテンが訊いた。

「多分さうでせう」

直きに馬車はホテルの前で停まつた。インシュテッテンとヴィラースドルフは席を立つた。馭者の傍へ寄つて行つてヴィラースドルフが命じた。「モーレへやつてくれ」

モーレ河は反對側の濱にある。左手でなくて右手に當る。こんな間違つた指圖を與へたのは、ひよつとして惹起するかも知れない不慮の棒事を用心してのことであつた。それはとにかく、先に出て右側を行かうと左側を行くつもりであらうと、どうせ「保育林」を抜けねばならず、さうしたらインシュテッテンの以前の邸の側を通らずには行かれぬ道順になる。邸宅は以前に増してひつそりした氣配で立つてゐた。二階はかなり荒れ放題に打つちやられてゐるらしい様子に見えた。まして階上はどんなだらう！　エフイが氣味悪く感じるのを、あんなにいつも取

り合はないで冷笑に附したりもしたインシエッテ自身も、いま厲寒に氣持に襲はれた。そして、そこを通り過きるとほつとしたのである。

「あすこにわたしは住んでたのですよ」

「普通ならぬ様子に見えますねえ。だいが流れて、構はずに棄ててあるらしいですね」

「さうかも知れません。町ぢやお化け屋敷で通つてゐるんですが、今日見たやうな様子では、人々のさういふのも無理ぢやありません」

「お化け屋敷だなんて、そりや一體どんなんです？」

「いや、馬鹿げた話でしてね。老船長が、孫娘だか姪だかといふところに、ある日その娘が行衛不明になつたんです。それと、多分娘の戀人だつたらしい一人の支那人。そして玄關に小さな鍬と鰐が一匹、どちらも紐で吊られて、しよちゆうゆらゆら動くのですよ。お話すればすてきにおもしろいのですが、今は止ませう。ひとがいろいろんな他の妄想を起こしますからね」

「萬事圓滿な結果に終るだらうといふことをお忘れになつてゐるんですね？」

「いや、いけません。先刻クラムバスのことをお話しになつたとき、あなたは御自分でそれとは違つたことを仰つしやつてましたよ、ヴァイストルフ」

それから幾何もなくして、彼等は（保育林）を抜けた。そこで駈者は右に折れてモーレ河の方角に向はうとした。「左に行つて貰はうか。モーレ河行くのは後にしてもいいんだ」そこで駈者は左の廣い車道へ曲つた。男子海水浴場の裏から、まつすぐ森に走つてゐる道である。森の三百歩も手前まで来て、ヴァイストルフは馬車を停めさせ、この所で三重に重なる砂丘を一直線に突つ切つてゐる、かなりな道幅の車道を、碎ける砂を踏みながらふたりは歩き出した。どこも道傍には濱燕麦がびつしり密生し、そのまはりに（不死の花）が、そして二三本、血のやうに赤い石竹の花があつた。インシエッテは躡みこんで石竹の一輪を取つてボタソ孔へ挿した。「むぎわらぎくはあとで取る」

かうして彼等は五分程も歩いた。とつぎの二つの砂丘の間の、相當に深い低地まで來たとき、左方に相手方の一行の姿が見えた。クラムバスにインシエッテ、それにあの善良なドクトル・ハンネマンだつた。ドクトルは帽子を手に取つてゐるので、彼の白髪が風にひらひらしてゐた。インシエッテとヴァイストルフが砂の谷間を登つて行くと、インシエッテがこちらに向いて來た。挨拶が交はされ、續いて兩方の介添人はわきに行つて、なほ簡單に事務的な話し合ひをする。歩調を揃へて前進、十歩の距離を隔てて發射すべきことに決められた。そこ

でアッデソアロークは彼の位置に戻る。すべてが迅速に處置せられ、——引金が引かれた。クラムパスがどつと倒れた。

二三歩退つたインシエッテンはその光景から面をそむけた。しかしザイラースドルフはアッデソアロークの傍に歩み寄つて、じつとドクトルの宣言を待つ。ドクトルは無言で肩をすほめてみせた。同時にクラムパスは手を動かして、何かいひたいことのあるのをしらせた。隣みこんだザイラースドルフは、顔死の唇から聞きとれぬほどに洩れる二三語の言葉に、同意するやうに頷き、それからインシエッテンのところに行つた。

「クラムパスがあなたと話したがつてゐます。聞いておやりにならぬきやありません。もう三分とはもいません」

インシエッテンがクラムパスに進み寄る。

「どうか……」それが最後の言葉だつた。

まだ彼の顔面には、苦しげな、しかし溫和なともいへる一抹の微光が漂つてゐたが、やがてすつかりことされてしまつた。

第二十九章

その日の晩に、インシエッテンは再び伯林に戻つてきた。砂丘の内側の十字路へ残しておいた馬車で、ケッシンの町は二度と通らず真直ぐ驛に乗りつけた。役所への届出は兩名の介添人に委せておいた。途中（車室は彼ひとりだつた）、すべてを今一度考へ直しながら、できごとと同様に耽つてゐた。二日前の考へと相違するところはなかつたが、ただ、今では考へ方の順序が逆だけで、彼の權利と義務の確信から始まつて、しまひはそれへの疑惑に終るのであつた。『罪、もしそれが一般に問題になるものだとするれば、場所と時間の束縛は受けてゐない。一夜のうちに崩れたりする筈ではない。罪は贖ひを求める、それには意義がある。しかし時効は中途半端な、軟弱な、少くとも何か散文的なものだ、かう考へてきて彼はしやんと身を起こし、来るべきことが來たのだと肚のうちで繰り返していつた。ところで、それが彼にとつては明々白々となつた瞬間、彼はがらりとその説を覆へした。『時効といふものがなければならぬぞ。時効は唯一の道理に適つたものだ。それに散文的なところがあるうと、そりやどうでもいい。道理に適つたことといへば、おおよそ散文的なものばかりなんだ。俺は今四十五歳になる。

「いや、いや、刺戟するばかりだ。顔を見るのは明日の朝にする方がいい。一杯お茶を持
つてきて貰はうか、ヨハンナ。誰かお客だったかね？」
「いいえ、^{ちがひ}醫者がおいでになりましただけで」
し……」
「お元氣でございます、旦那さま。まだ寝ついておいでございません……旦那さまがも

十時ちよつと前にインシエナッテンは家の門口に着いた。階段を昇つて呼鈴を曳く。ヨハン
ナが出てきて扉を開けた。
「アニーはどうしてる？」
の語るやうな、無言でかすかに訴くるやうな眼が、目先きにちらつくことはなかつたらう……」
敷ある。夫婦とは名ばかりの夫婦も多いのだ……さうなれば幸福は失はれたらうが、あの男
女と離別すべきだったのだ。世間に知らすことではなかつた。この世には生活ならぬ生活が数
ずに歸つて來たら、『さあ、ここがお前のあるところだよ』と、さういつてやり、心のうちで彼
棄てるべきだった。そして決して世間に知らせおやならなかつた。それから彼女が、何も知ら
彼女ばかりか俺も一しよに破滅させねばならないことになつてゐる……。俺はあの手紙を焼き

212
あの手紙を二十五年おそく発見したとすると、俺は七十になつてゐる。さうしたら、ザイラー
スドルフは『インシエナッテン、馬鹿な眞似はお止しなさい』といつたことだらう。彼がいは
なきやアッデングロークがいつたらう。此奴もいはなきや俺自身が……。これは確かなことだ
と思ふ。何事も極端まで押し詰めると、つい誇張して、馬鹿げた眞似をするものだ。間違ひの
ない話だ。しかしどこからがさうなるのだ？ 境ひ目はどこにある？ 十年ならまだ決闘を要
求して、そこちや名譽と呼ばれるのに、十一年後、否、既にもう十年が半年過ぎたら馬鹿げて
るといはれる。その境ひ目、眼界、それはどこにあるんだ？ そいつが既に來てゐたのか？
既に踏み越えられたといふのか？ あの男の最後の眼附を思ひ出すと、諦めきつて、あの惨め
さにありながらなほ且つ微笑を湛へてゐた。あの眼差しは、『インシエナッテン、杓子定規だ…
…僕をこんな目に逢はさないで濟んだ、君自身だつて助かつたのに』と、さういつてゐたぞ。
おそらく彼が正しかつたのだらう。俺の心中にそんな響きがするわい。さうだ、もし俺の胸が
死ぬほどの憎しみに溢れ、むらむらと深刻な復讐心に燃えてゐるのだつたら……復讐は美しい
ものではないけれど、何か人間らしい感情だ。そしてむしろ人間的な權利を持つてゐる。だが、
實際あつたのはすべてが觀念の満足のため、概念のためにしたことだ、無理に拵へあげた事
件だつた、半ば喜劇に類してゐるのだ。しかも俺はこの喜劇を續演して、エフ！を追ひ出し、

そこでまた彼は獨りきりになつた。いつもの癖で、行きつ戻りつ歩く。みんながすべてを知つてゐるんだ。ロスヴァーダはほんやりだが、ヨハンナは側巧者だからな。はつきりは知らな
いとしても、何とか解釋をつけて、やつぱり知つてゐるんだ。どんな祕めごとでもいいしか外に
現はれて、事情がのこらず洩れてしまひ、まるでどのひともその場に居合はせたかのやうにな
るのは、奇妙千萬だて

ヨハンナがお茶を運んできた。インシュテッテンはそれを飲む。極度の緊張の後で死ぬほど
疲れてゐた彼は、ぐつすり寝込んでしまつた。

インシュテッテンはちやうどいい時刻に眼を覺ました。アニーを見て、一言三言言葉を交
はし、おとなしい病人で感心だねと褒めてやり、それから役所に行つて、長官に一切のできご
とを報告した。大臣は特別寛大で、「まづたくインシュテッテン君、人生で逢遇するすべての事
件を巧妙に切り抜けるひとは幸せだね。君はそいつをやつてのけたんだ」といひ、起こつたこ
とをすべて至當と認めて、あとのことはインシュテッテンの處置に委せてくれた。

午後も遅くなつてやつと家に歸ると、ヴァイースブルフから數行の手紙が届いてゐた。

——今朝歸宅。實に種々の世相を體驗、痛々しく胸を衝くことばかり、ギースヒュープ

ラーはその最たるものに候。嘗て見ざる好人物の何僕男なり。貴下に就いては多くを申さず、
ひたすら御夫人の身の上のみを案じをり、心痛に堪へずして遂には涙の堰を切るありさま。
誠に何事の起るやら、測り知れぬことにて候。ギースヒュープラー如き人物の存在こそ、
多々あつて然るべしと存ぜられ候が、打つて變つた人物のみ數多き實狀に候。ついで少佐宅
での一場面……全く凄慘至極。何事もここには申すまじく、ただ再び論ざれ候ことは慎重な
れの教訓に御座候、いづれ明日拜趨仕るべく、先づは一筆——

インシュテッテンはこれを読んですつかり衝撃をうけてしまつた。机に坐つて、彼も彼で二
三通の手紙を書いた。それが終るとベルを鳴らした。「ヨハンナ、この手紙を投函しておくれ」
ヨハンナが受取つて去らうとする。

「……ああ、それからね、ヨハンナ、もうひとつ。家内は二度と戻つて來ない。何故かはお
前ひとから聞いただらう。アニーには知らせやならない。少くとも今のところはいけない。
可哀さうな子だ。もう母親はないのだといふこと、だんだんにお前から悟らせてやつて貰はな
きやならない。わたしにはできない。どうかうまくやつておくれ。それから、ロスヴァーダが
萬事ぶち壊さないやうにね」

魂が抜けたみたいに暫くヨハンナは茫然と笑つ立つてゐたが、やがてつかつかと歩み寄つて

イシシエテツシンの手に接吻した。

い。御主人はすべてを彼女にお話しになつたばかりか、しまひに、ロスザイターが萬事ぶち壊さないやうにね、と仰つしやつた。それが何より肝腎のことだつた。彼女に善良な心がないではなし、奥方への同情をも缺いてゐるわけではなかつたが、他の何にも増して御主人に對する或る親密な立場をえた勝利感で胸一杯なのであつた。

これが普通の事情だつたら、この勝利感を吹聴したり、みせびらかすのはむしろ容易いことだつたらうが、今日の場合彼女にとつて工合が悪かつたのは、かねてから氣心を許したことのない競争者が、自分の方こそこの家の機微に通じてゐるぞといつたところを示しかねないのだ。といふのは、丁度このことのあつた前後に、下の門番がロスザイターを彼の小部屋に呼びいれて、闕を跨ぐや否や一枚の新聞を押しよこして讀んでみるといつた。「そら、ロスザイターさん、お前に用のあることが出てゐるよ。あとで下へ返してくれりやいんだ。これは他國の新聞ぢやあるが、レーネが今、小新聞を取りに行つてゐるんだ。あれには屹度ずつと詳しく載つてゐるだらうよ。いつも何でも出てないことはないからね。ねえ、ロスザイターさん、思ひがけない、飛んでもないことぢやないかい」

平素はさほど好奇心の強くないロスザイターだが、かういひかけられると大急ぎで裏階段を駆け上つた。そしてちやうど讀み終つたところへヨハンナがはひつて來たのだつた。たつた今イシシエテツシンから手渡された手紙を机に置いて、さりげなく宛名に眼を通す。或ひは少くともそんな體を装つたのだ。(誰に宛てたものかはとつくに知つてゐたから) そしてうまく冷靜さを繕ひながらかういつた。「ホーエシ・クレムソンの宛てのが一通あるわね」「おりさうなことを思ひますよ」とロスザイターが應ずる。その言葉にヨハンナは少からずびつくりした。「平生めつたに旦那さまがホーエシ・クレムソンの書きになることはないのにねえ」

「ええ、平生ならさうだけど、この場合にはねえ……まあ考へてごらんさいな、これをたつた今、下の門番がわたしに呉れたんですよ」

ヨハンナは新聞を手にとつて、半分聲に出しながら、イシキで太い線の引かれた箇所を讀んだ。『編輯締切時間直前に至つてさる確實なる筋より入手せる報道に依れば、昨朝奥、ボンスメルン州の浴場クッシンに於いて、省參事官Ⅴ・I(カイト街住居)とフオン・クラムパス少佐との間に決闘が行はれ、フオン・クラムパス少佐は仆された。傳ふる所では、彼と、美貌にして未だ妙齡なる參事官夫人との間に密通關係ありたる由……』